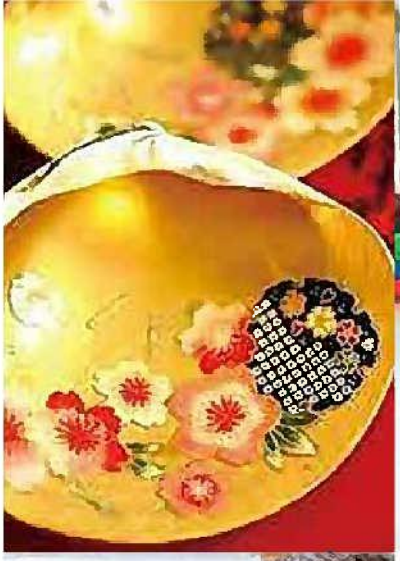
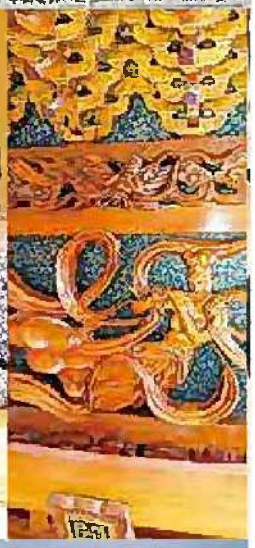
ハタチからの参考書

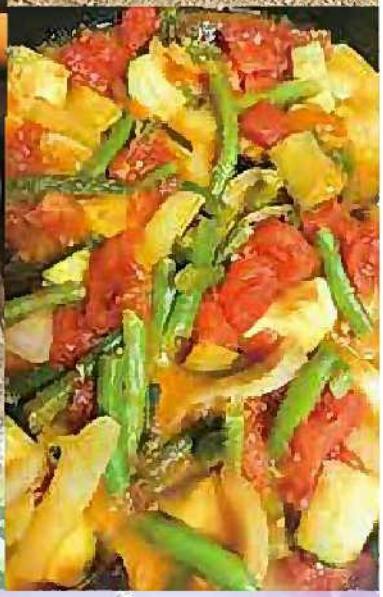
～これからのじぶんをイメージする～

未来のライフデザイン啓発事業





はーけえるん?
東沼田市



はじめに

この本が

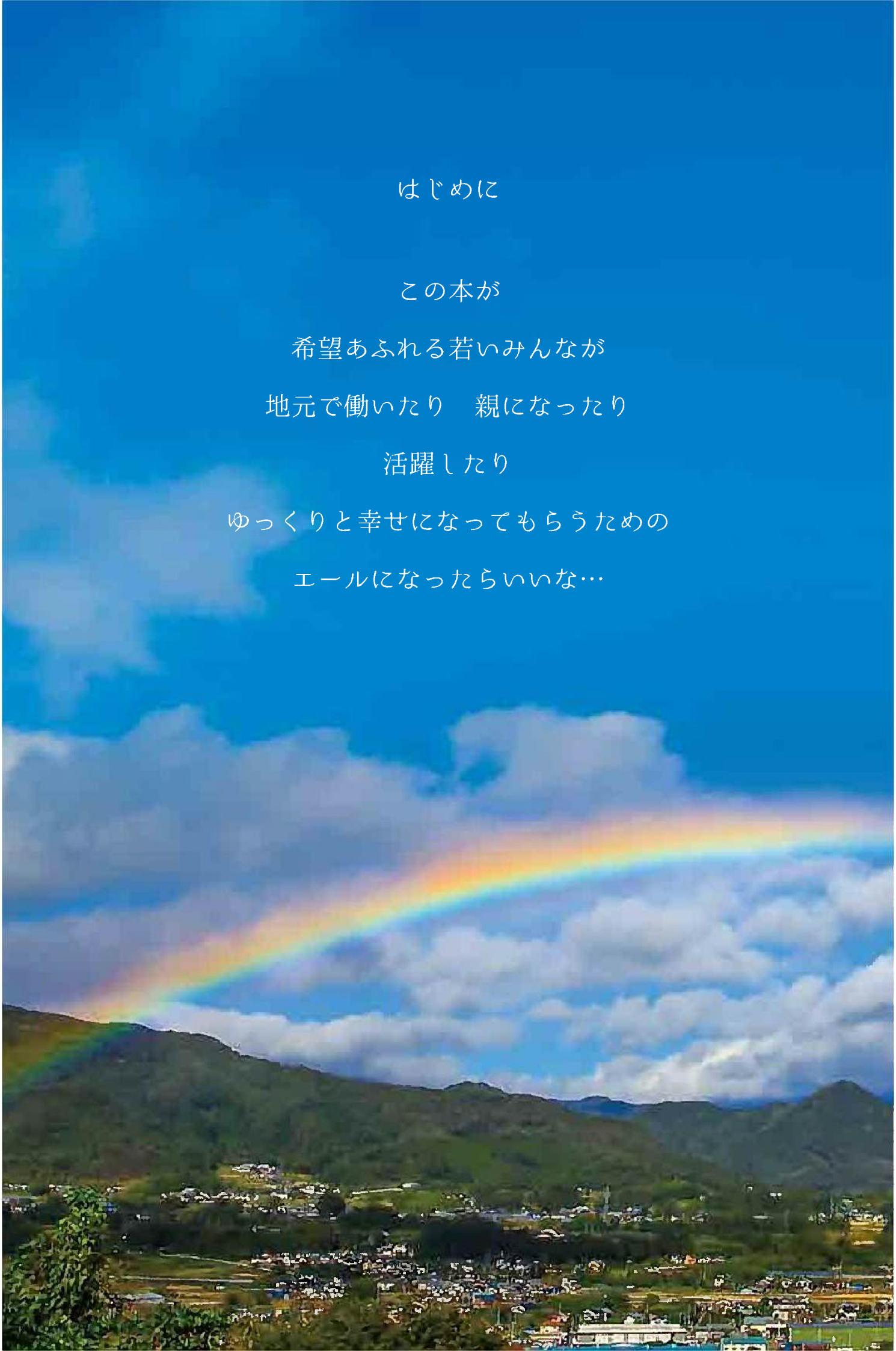
希望あふれる若いみんなが

地元で働いたり　親になったり

活躍したり

ゆっくりと幸せになってもらうための

エールになったらいいな…



ハタチ

ハタチになるみんなは、どんな疑問や悩みを

将来のことってまだよくわからないなー

やりたいことを仕事にできるのかな？

人とのつきあいってむずかしくないですか？

都会にない沼田の良さって何？

成人式実行委員会のみなさん

の疑問

持っているのか。実際にきいてみました。

結婚てどんな感じ？

子育てって大変？

先輩たちはどうしてたんですか？

実際にきいてみました！

Hug Hapi

次のページへ

塩野さん家の場合

沼田市出身

パパヒストリー

38才

39才

中之条出身

ママヒストリー

31才

33才

結婚

長男誕生

〈ママの思い〉

結婚して、慣れない土地に来たけれど、主人がいろんなところに出ているおかげで、私も多くの人と知り合うことができ、この地域に親しんでいくことができました。沼田の人はみんなあったかい人ばかりで、色々と相談にのってもらいながら、とても落ち着いて生活できています。子どもが産まれて、また以前とは違う幸せを感じています。

ふるさとに誇りを持ち、この土地の名産品を世に送り出す仕事に一生懸命取り組みながら、地域の活動にも力を入れて、忙しい中でも早く帰れるときは育児を担ってくれるパパの背中を誇らしく頼もしく思えることも、とても幸せで感謝しています。

母校で講演をしています

母校である川田小学校の5～6年生にキャリア教育の一環として枝豆の生産過程とその作り手の思いについて話をしてきました。講演を聞いた子どもたちが、少しでも農業に興味をもったり、自らの将来や夢に向かう一助となってくれたらうれしいです。

そしていま

【子どもが生まれて】
自分自身が親の背中を見て育ち、親を誇りに思ったように、自分自身が子どもにとって誇れる親でありたいと思うようになりました。それとともに、生まれ育った地域にも誇りをもってもらえるよう、利根沼田の素晴らしさを伝えていきたいです。

【新成人の皆さまへ】
仕事や結婚生活って大変なことばっかりです。でも、乗り越えた分だけうれしさや充実感も倍増します。でも、それには自分の心の内から湧き起こる「面倒くさい」っていう気持ちをどれだけ乗り越えられるかにかかっています。好きなことなら面倒くさいことも乗り越えられると思いますが、実は好きでもないことも面倒くさいを乗り越えてみたらすごく好きになったり、やって良かったと思うことばっかりです。そういったことの積み重ねが仕事の結果として現れたり、妻と子どもの笑顔につながったり、今では仕事と家庭が自分自身の生きがいになっています。新成人の皆さまも「面倒くさい」って気持ちに負けず、それを乗り越えていつか自分なりの「生きがい」を見つけてくれたらうれしいです。

瀧澤さん家の場合

みなかみ町
出身

パパヒストリー

1977年　生まれ

19才　大学生（東京）

23才　就職（利根沼田）

26才

秋田県
出身

ママヒストリー

1980年　生まれ

18才　高校卒業（秋田）

19才　大学生（前橋）

23才　臨時教員として働きながら試験勉強

出会う

24才　沼田に移住

きっかけはパパの
双子の弟
ママはパパのサッカーを
見に行ったり、和太鼓
を始めたり・・・

29才

結婚

26才

秋田のみんなを沼田に呼んで
楽しい結婚式に

パパヒストリー

趣味のサッカーで選手や
監督をする

34才

ちょくちょく秋田へ
保育園の保護者会長に

40才

長男誕生

マイホームを建てる

長女誕生

次男誕生

ママヒストリー

27才

29才　仕事・育児をしながら
教員採用試験合格!!

31才

里帰り出産のため長男と
ママ秋田へ
パパと３か月離ればなれに

37才

そしていま

秋田で生まれて秋田で育った私は、沼田市に住むことは想像していませんでした。いろいろな人からのアドバイスやいろいろな人との出会いによって、ここに来ることができました。パパやパパの友達、家族があたたかく迎えてくれたことで、利根沼田の良さにふれて、安心して仕事や子育てができています。お祭りに家族で参加するのも大好きなので毎年楽しみにしています。

飯村さん家の場合

大阪府出身

奈良県出身

パパヒストリー

20才　大学生（大阪）

22才　大学院生

24才　就職→ 沼田へ

ママヒストリー

18才　短大生（奈良）

20才　卒業後フリーランスで働く

出会う

遠距離

いい加減結婚しようよ！

28才　26才

この人となら一生一緒に暮らせるなと思い結婚を決意

結婚

自宅で音楽教室を開き演奏活動を始める

30才

第一子誕生

28才　出産・育児がきっかけで子育て支援に関わるように

（マイホーム建てる）

パパヒストリー

33才　第二子誕生

37才　地区の育成会役員に

39才

41才　産後しばらく育児休業の代わりに有給を使って休み妻をサポート

ママヒストリー

第二子誕生　31才

第三子誕生　37才

第四子誕生　39才

そしていま

私たちが20才の時は将来のことなんて未知の世界。
それでもなんとかなるだろうと思って楽観的でした。
今思えば20代の若い時期は年を重ねてからよりも
とても密度が濃い、心身ともに充実した時期でした。
新しいことへのチャレンジや、スキルを磨くことも
30代、40代よりもスムーズです。この年代で得た土台
によってその後の人生がより良いものになるでしょう。
でも、たとえ受験や就職で思い通りにいかなくても、
人生の道は一本道ではないのです。様々な経験を経る
ことで、無限の可能性が広がります。
大切な人生を楽しんでください。

先輩たちの座談会

利根沼田で元気に暮らしている方、自分で何かを生み出してそれを仕事にしている方に集まってもらい、お話を聴きました。インタビュアーは沼田市の子育てを応援する活動をしているHugHapi（はぐはぴ）のメンバー。年齢も出身も様々な皆さんですが、語り合っているうちに浮かんできたキーワードは「農業」でした。

地元に帰ってきて就農　――工夫していいものを作るって楽しい

根岸宏行さん（38歳）

根岸さんは、千葉県の農林大学校で学んだ後、24歳で実家の利根町老神で農業を継いだ。実はこのトークの参加者全員と関わりがある根岸さん。穏やかにみんなの話を受けとめながら、みんなの縁をつないでいる根岸さんなのである。

なぜ農業を継ごうと思ったのですか？農業は大変ではないですか？

高校生のときは農業を継ぐことは考えてもいなかったです。実際就農してみて、頭で考えるのではなく、まずはとにかく色々やってみるうちにトマト栽培に行き着きました。種屋さんで種作りや肥料を学んだ経験を活かし、工夫して良い物を作る楽しみを感じています。思うようにならない農業だからこそ、やりがいを見つけて今までやってきた感じです。

こだわりの農業がTVに紹介されたことも

地元で就農　――　人づきあいは苦手でした

吉澤佳輝さん（22歳）

農林大学校で学んだ後、21歳で実家の農家に就農した吉澤さん。
吉川和孝さんとは就農が同期である。トーク参加者の中で最年少ながら、肩の力を抜いて堂々と語る姿が頼もしい。

若いうちからの就農、地元で暮らすことについての思いを聴かせてください

実家が農家だったので何となく就農しました。もともと人付き合いはそんなに得意な方ではなかったのですが、就農してから始めたバドミントンを通じて、少しずつ知り合いができました。今年になって比較的大きな自動車事故に遭ったときに、知り合いが心配して力になってくれ、人の温かさが身にしみました。もともと人と深く関わることや、自分をさらけ出すことが苦手なタイプでしたが、事故をきっかけに、みっともない自分をさらしたことで、結果的に人とつながることができました。人前で発表する機会も増え、堂々と「楽しいことをしたい！」と人に言えるようになりました。

移住して就農 —— りんご農家にあこがれて —— なんとかなる

太田龍之介さん（28歳）彩華さん（30歳）

龍之介さんは東京都世田谷区、彩華さんは横浜市とふたりとも都会の出身である。龍之介さんは小学生の頃、川場村での農業体験の中で話を聴いたりんご農家の方の生き生きとした姿に感銘を受けたことをきっかけに農業に関心を持った。大学卒業後、ボランティアを通じて知り合った彩華さんと結婚、国の青年就農制度により川場村に移住してりんご作りを学び、4歳と2歳の息子さんの子育てをしながら、りんご農家を営んでいる。

都会から移住してくることに迷いはなかったですか？

龍之介さん

田舎の人が都会を新鮮に思うのと逆で、自分にはこの地域にあるものがまぶしく見えました。実際好きなことで生計を立てるのは楽ではなくて、りんご作りも子育ても想定外のことが多いけれど、悩んだり迷ったり笑ったりしながら、妻のおかげで何とかならせてもらっています。

地元を離れての子育て、大変ではないですか？

彩華さん

村の皆さんが家族のように助けてくださるのでありがたいです。自然の中で子どもを自由に遊ばせることのできる環境もいいですね。地域の行事やぐんま農業フロントランナー養成塾にも参加しています。家にこもらず外に出るのが大事だと思います。村の皆さんは外から来た私たちを、温かく受け入れてくださいました。子育てについても、近くに親や親戚がいないため、夫婦でひとつひとつ話し合って協力しながらやっていくしかない分親として成長できたと思います。

先輩たちの座談会

沼田ならではのりんごの直売が自慢です

染谷千恵美さん（43歳）

HugHapiメンバーの染谷さんもトークに参加。染谷さんは、沼田市出身。地元を離れて進学・就職したが、沼田でりんご園を経営するご主人と出会い結婚、子育てをしながら薬膳料理教室を開催、「食と家族の健康」をキーワードに活動している。

沼田でのりんご園経営の特徴は?

りんごの販路ですが、都会への流通シェアは青森と長野がほとんどで入り込む余地がなかったため、沼田では、りんご狩りに来てもらって直売するという方法を先代が確立し今に引き継がれています。今となっては、青森、長野の農家さんにうらやましがられているんです。

若いときに得たスキルが今の農業に生きている

吉川和孝さん（44歳）博子さん（45歳）

和孝さんは東京都出身。博子さんの地元は昭和村。ふたりは大学の先輩・後輩の関係で、京都の大学で学んだ後、そのまま京都で就職した。和孝さんは、文化財の保存の仕事をしていたが、祖父が長野県でわさび田を営む農家だったこともあって元々農業に興味があり、2年前に博子さんのお父さんが亡くなったことをきっかけに、博子さんの実家の昭和村に移り住んで農業を始めた。

43歳で農業を始めたということですが、どんな農業を目指していますか？

和孝さん

周りは大規模農家が多いが、自分では大きく農業をしていこうという路線ではなく、高原地帯ならではの夏場ほうれん草、唐辛子や行者にんにくを自分たちで作って、加工して販売するという、6次加工で食という分野で生計を立てていこうと考えました。加工品に関しては、農薬を使わないこと、無添加であることを大切にし、昔ながらの製法にこだわっています。

移住して就農した立場で見た利根沼田は、暮らす場所、働く場所としてどうですか？

和孝さん

40歳を過ぎるとウィンドーショッピングをしたい、とかの欲求はないので、生活に不便はなく、むしろ自然が一杯で暮らしやすいと感じます。村の運動会に参加したりして、地域の人に受け入れてもらえて、ほうれんそう作りの師匠ができました。農業には定年がなくて、年齢を重ねることで経験値がどんどん増え、がんばった分成果をを出していけるのが魅力です。

博子さん

地元を離れていた期間が長かったので、まるで新人のような気持ちで、ぐんま農業フロントランナー養成塾や地元の集まりに参加しています。年齢差のある人たちとの出会いは、京都では無かった経験ですね。

「利根沼田で、お勤めではなく自分で創り出す仕事をしている方」というキーワードで声かけをしたところ、全員が農家という集まりになりました。もちろん職業の選択肢は色々ありますが、トークに参加していただいた根岸さん、吉澤さん、太田さん、染谷さん、吉川さんそれぞれが自然体で、「人とのつながり」を大事にしながら、仲間と学び合いながら、工夫して苦労を楽しみに変えながら、本当にやりたいことをやっている、飾らないけれど輝いている姿が印象的でお話を聴いて、「農業ってとってもクリエイティブな自営業なんだなー」と、今まで持っていたイメージが大きく変わったのでした。

HugHApi